

収蔵資料
調査報告書

27

巨椋池等の漁労用具・関係資料

2025. 3

宇治市歴史資料館

収蔵資料 調査報告書

27

巨椋池等の漁労用具・関係資料

歴史資料館では、昭和 59 年(1984)の開館以来、資料の収集に努めて参りました。市役所内の各部署とも連携をはかり、本市における歴史資料保存施設としての役割も果たしています。

今回は、巨椋池等の漁労用具及び巨椋池関係資料等についてまとめました。

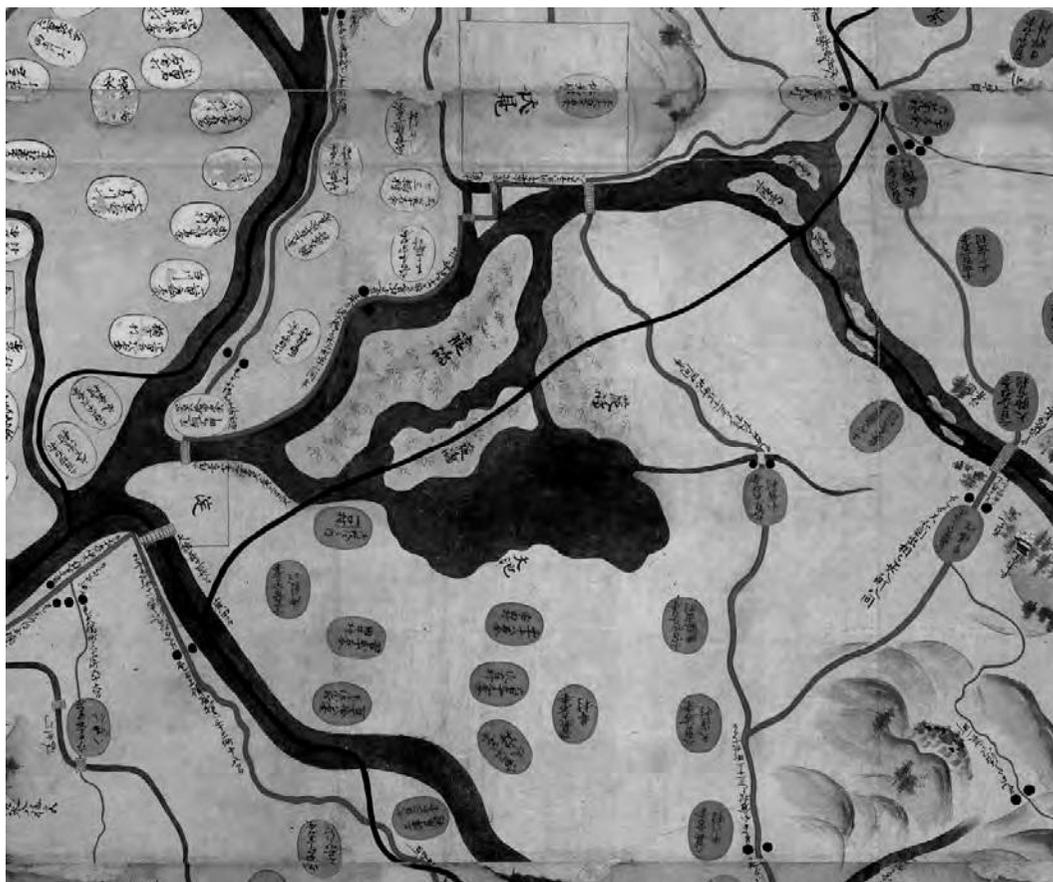
令和 7 年 3 月

宇治市歴史資料館

目 次

1	巨椋池漁労用具資料収集の経緯	1
2	資料目録 巨椋池等の漁労用具	7
3	資料目録 館蔵巨椋池関係資料	27
4	(報告) 小倉町・巨椋神社の秋祭り	38
	むすびにかえてー漁を見ていた人々の聞き取りからー	46

■ 1 巨椋池漁労用具資料収集の経緯



大池(巨椋池)周辺「山城国絵図」部分
江戸時代前期

宇治市の西部、京都市伏見区、久世郡久御山町に面して、かつて巨椋池という大きな池があった。江戸時代に描かれた古絵図では、「大池」などと記されているこの池は、南北に約3 km、東西に約4 km、周囲約16 km、面積794 haにおよぶ大きさであった。巨椋池は北から桂川、南から木津川、東から宇治川が流れ込む山城盆地で一番標高の低いところで、西の淀川に向かって流れ出す遊水池の機能を果たしていた。池にはコイ・フナ・ナマズなどの魚類などが生息し、周辺では池とともに暮らす人々の営みがあった。また、夏には蓮見に訪れる人々や、秋にはカモなどの渡り鳥の狩猟に人々が集まるなどレジャーの場としても、豊かな自然を人々に提供していた。

今回の報告書は、そんな巨椋池等の漁労用具や関係資料を紹介する。

■漁労用具資料収集の経緯

宇治市歴史資料館は、宇治市史編さん事業を前身として、昭和 59 年(1984)に開館した。開館当初は、基本資料となるコレクションが少ない状況からのスタートであったという。当時の様子は、当館元館長の坂本博司氏による「民具を受入れ始めたころー「たまり場」としての資料館ー」（『宇治市歴史資料館収蔵資料調査報告書 19 宇治茶の民具』所収、2017 年）に詳しい。以下、この報告を参考としつつ、漁労用具収集の経緯を概観する。

市史編さん事業では、市史に関する古文書調査が市内外を問わず行われ、その文書群すべて、または一部が撮影されていた。そのため古文書に関する「情報」は比較的多く、また、開館当初の展覧会は、地元の古文書所蔵者の協力や近隣の博物館等からの資料借用などによって行われていた。

昭和 61 年(1986)には、宇治茶の次に基本となる展示のテーマとして、「とりあえず何となく形にできそうなテーマ、それ自体を活用できそうなフィールドとしてあった」巨椋池が注目された。巨椋池をテーマとした企画展は、この年の年間テーマとして位置づけられ、3 回行われた。これらの企画展では、市史編さん事業からの繋がりを得た巨椋池に関する写真や図をはじめ、古文書や絵図などの資料が活用された。

展示した古文書の中には、江戸時代の漁師が仲間を組織して活躍したことや漁師と沿岸農民との間で利害が対立し、争論を繰り返した様子が見える史料が含まれていた。こうした文字による史料に加えて、実際に「川魚漁で用いられた漁具が加われば」、より深く水辺の生活を理解することが可能となる。また、展示構成の上からも、「民具の必要性を痛感させられた」という。しかし、昭和 61 年の段階で、「宇治市内でかつて漁業を営んだ人はすでに皆無」であった。また、当時は設立の準備段階から「民具資料に関しては積極的には収集しない」という「基本的な態度」があった。こうした背景もあり、漁労用具の収集は困難な状況であった。こうしたなか、展覧会等で「その当時よくお手伝いいただいた」久御山町の方を介して、「使われていた漁具」を収集、展示することができたという。

後述するように当館所蔵の漁労用具は、この時に収集した資料が基本となっている。そして、これ以降も巨椋池の展覧会を繰り返すごとに、宇治市や周辺住民の方々のご協力によって、少しずつ漁労用具が集まり今日に至っている。



■宇治市歴史資料館でこれまでに開催した巨椋池の展覧会

巨椋池をテーマとした展覧会は、開館年に実施したパネル展や、先述の昭和 61 年(1986)度に 3 回の企画展を実施した。昭和 63 年(1988)度以降は、令和元年度の常設展設置に至るまで、お茶に続くメインテーマの展示となり、ほぼ毎年度実施してきた。これまでに実施した巨椋池に関する展覧会を紹介すると、次のとおりとなる。

■「巨椋池」に関する展覧会一覧

	年度	展覧会名	期間
1	昭和 59 (1984)	パネル展 環境と景観の変遷(地理)	昭和 59 年 12 月 11 日～ 昭和 60 年 1 月 20 日
2	昭和 61 (1986)	企画展 やましろの大池 －巨椋池のうつりかわり－	昭和 61 年 4 月 4 日～6 月 29 日
3	昭和 61 (1986)	企画展 巨椋池のくらし －水と土に生きる－	昭和 61 年 7 月 1 日～9 月 14 日
4	昭和 61 (1986)	企画展 水辺の文化 －流域の生活誌－	昭和 62 年 1 月 10 日～3 月 29 日
5	昭和 63 (1988)	企画展 今と昔の巨椋池	昭和 63 年 8 月 18 日～8 月 20 日
6	昭和 63 (1988)	企画展 収蔵品展	昭和 63 年 11 月 8 日～ 平成元年 1 月 14 日
7	平成元 (1989)	企画展 今と昔の巨椋池	平成元年 7 月 23 日～9 月 10 日
8	平成元 (1989)	企画展 収蔵品展	平成元年 12 月 9 日～ 平成 2 年 1 月 14 日
9	平成 2 (1990)	企画展 収蔵品展	平成 2 年 10 月 13 日～ 平成 3 年 1 月 13 日
10	平成 3 (1991)	企画展 いまとむかしの巨椋池	平成 3 年 7 月 23 日～9 月 14 日
11	平成 4 (1992)	企画展 いまとむかしの巨椋池	平成 4 年 7 月 21 日～9 月 21 日

12	平成 5 (1993)	企画展 いとむかしの巨椋池	平成 5 年 7 月 20 日～9 月 12 日
13	平成 6 (1994)	企画展 いとむかしの巨椋池	平成 6 年 7 月 16 日～9 月 4 日
14	平成 7 (1995)	企画展 いとむかしの巨椋池	平成 7 年 7 月 18 日～7 月 30 日、 8 月 22 日～9 月 3 日
15	平成 8 (1996)	企画展 いとむかしの巨椋池	平成 8 年 7 月 16 日～9 月 8 日
16	平成 9 (1997)	企画展 いとむかしの巨椋池	平成 9 年 7 月 15 日～9 月 7 日
17	平成 9 (1997)	併催 企画コーナー 巨椋池観光案内所	平成 9 年 7 月 15 日～9 月 7 日
18	平成 10 (1998)	企画展 いとむかしの巨椋池	平成 10 年 7 月 18 日～9 月 6 日
19	平成 10 (1998)	併催 企画コーナー 巨椋池観光案内所	平成 10 年 7 月 18 日～9 月 6 日
20	平成 11 (1999)	企画展 むかしの道具と巨椋池	平成 11 年 7 月 17 日～9 月 12 日
21	平成 13 (2001)	企画展 昔の道具と巨椋池	平成 13 年 7 月 17 日～9 月 22 日
22	平成 14 (2002)	企画展 巨椋池の歴史資料	平成 14 年 7 月 21 日～9 月 8 日
23	平成 15 (2003)	特別展 おぐら池 －入江・大池・巨椋池－	平成 15 年 10 月 4 日～11 月 16 日
24	平成 16 (2004)	企画展 ちょっと昔の暮らしと風景 with おぐら池	平成 16 年 7 月 20 日～9 月 12 日
25	平成 18 (2006)	企画展 まるごと・いろいろ・たからもの －『地域まるごとミュージアム』の ひとつの試み－	平成 18 年 5 月 16 日～7 月 2 日

26	平成 18 (2006)	企画展 おぐら池ーいま・むかしー	平成 18 年 7 月 22 日～9 月 10 日
27	平成 19 (2007)	企画展 おぐら池	平成 19 年 7 月 21 日～9 月 9 日
28	平成 20 (2008)	企画展 おぐら池	平成 20 年 7 月 19 日～9 月 7 日
29	平成 21 (2009)	企画展 発見！昔の暮らしとおぐら池 with 京都文教大学教育 GP	平成 21 年 7 月 18 日～9 月 13 日
30	平成 22 (2010)	企画展 おぐら池とちょっと昔の暮らし	平成 22 年 7 月 17 日～9 月 12 日
31	平成 23 (2011)	特別展 巨椋池 ーそして、干拓は行われたー	平成 23 年 10 月 1 日～11 月 20 日
32	平成 24 (2012)	企画展 おぐら池 ー漁業・干拓・米づくりー	平成 24 年 6 月 30 日～9 月 9 日
33	平成 25 (2013)	企画展 おぐら池 ー変わる暮らしと景観ー	平成 25 年 6 月 29 日～9 月 8 日
34	平成 26 (2014)	企画展 おぐら池 ーヘリ・マンナカ・チュウドオリー	平成 26 年 7 月 12 日～9 月 7 日
35	平成 28 (2016)	企画展 夏のおもひで。 ー暮らしの道具とおぐら池ー	平成 28 年 7 月 16 日～9 月 11 日
36	平成 29 (2017)	企画展 空から見た巨椋池	平成 29 年 7 月 15 日～9 月 10 日
37	平成 30 (2018)	企画展 宇治電・天ヶ瀬・巨椋池 ー宇治川の土木遺産ー	平成 30 年 7 月 14 日～9 月 9 日
38	令和元 (2019)	企画展 昭和 28 年災害と天ヶ瀬ダム ー巨椋池再現 今伝えたい記憶と記録ー	令和元年 7 月 13 日～9 月 8 日

39	令和 4 (2022)	特別展 山地、平野、川とともに池 －宇治のくらしと空間－	令和 4 年 9 月 17 日～11 月 27 日
-	令和 3 (2021)	常設展	令和 3 年 6 月 8 日～

■ 2 資料目録 巨椋池等の漁労用具

■ 当館所蔵漁労用具の概要

先の「漁労用具資料収集の経緯」にも記したように、現在、当館が所蔵する漁労用具は、全 83 件のうち 43 件が、久御山町東一口でかつて漁業を営んでいた家から、昭和 61 年（1986）に寄贈された資料である。これら以外の資料群としては、宇治川で観光船業を営んだ家の漁労用具と、木津川で漁を行っていた家からの復元資料がある。その他は、その時々農具などと共に寄贈された資料である。

当館が昭和 59 年（1984）に開館し、昭和 60 年代に漁労用具を収集し始めた時には、すでに巨椋池はなく、干拓工事開始後 50 年ほどが経過していた。かつて巨椋池があった地には、広大な耕作地が広がり、多くの方々が漁業に関係する仕事から離れ、ずいぶん年月が経っていた。このことが、巨椋池の漁労用具を多く収集できなかった一つの原因である。

宇治市内で巨椋池の漁業権を持った小倉の地域でも、すでに漁業に関わった人は皆無で、収集できる漁労用具類もほとんどなかったのではないかと考えられる。一方、同じく漁業権を持った久御山町東一口では、干拓後も古川や宇治川などで漁を続けた家もあったが、その漁労用具の多くはまず久御山町や巨椋池土地改良区に収蔵された。今となつては、展覧会等の関係で機を得た方を介して寄贈された当館の漁労用具の存在は貴重である。宇治川や木津川等で使用された漁労用具についても同様で、漁を営んだ家から漁労用具を一括で収集することはできなかった。

このような中で、宇治川やその周辺の池や川などで使用されていた、家々で簡単に行える魚取りの道具を、地域の方々からご寄贈いただくことがあった。近年でもガラス製のビンモンドリを 2 件、寄贈いただいた。モンドリ漁については、現在も「中学生の時までモンドリを使って魚を取っていた」という経験のある方から、使い方等の生きた話を聞くことができる。これらは資料と共に貴重な情報となり得る。

以上のような事情から、当館所蔵の漁労用具は、巨椋池や宇治川等で行われた漁業で使用された漁労用具がすべて揃うというわけではない。しかし、久御山町東一口で最後まで漁を続けてこられた家のまとまった漁労用具が収集できたことは、幸運であり、貴重である。また、巨椋池やその周辺の池や川などで使われていた漁労用具類の中には、戦後も使われていたものもある。最近はほとんど見られなくなった、家の近所の川などで魚を獲って食べるという習慣も含め、人々の生活の変遷を考える上で、今後も漁労用具の収集、調査、研究は必要である。

■資料目録

凡例

1. 本目録は、館蔵の収蔵資料のうち漁労用具に関する資料をまとめたものである。受入時期により資料No.の付与方法が異なる。
2. 目録は、通番、収蔵番号、資料No.、資料名、点数、法量・備考の順に記した。各項目記載内容は下記の通り。
通番) 本目録の通し番号。
収蔵番号) 当館の「収蔵資料目録」に登録された受入資料ごとに付した番号。
資料No.) 民俗資料の所蔵者毎に番号を付け、ハイフンの後は枝番号を記した。目録の後半は枝番号のみ。
資料名) 原則としてカタカナで記し、適宜漢字を補った。通常漢字で表記されるものはそれを活かした。
備考) 資料の法量を記した。法量の単位は mm。また資料の説明などを適宜記載した。

通番	収蔵番号	資料No.	資料名	点数	法量・備考
1	100018	U1-3	ドジョウモンドリ	1	長 475、径 155
2	100059	U2	ダマル	1	径 530、高 530
3	100063	23-39-1	ビンモンドリ	1	長 225、径 116
4		23-39-2	ビンモンドリ	1	長 225、径 116
5		23-39-3	ビンモンドリ	1	長 252、径 112
6		23-40	ズキリダマル	1	径 400、高 250
7	100075	46-43	モンドリ	1	長 590、径 200
8	100102	K2-1	ジョウダテモンドリ	1	全高 1740、(釜)長 1000、径 330
9		K2-2	ジョウダテモンドリ	1	全高 1805、(釜)長 1040、径 380
10		K2-3	ジョウダテモンドリ	1	全高 1790、(釜)長 1050、径 350
11		K2-4	ジョウダテモンドリ	1	全高 1805、(釜)長 1020、径 310
12		K2-5	ドジョウモンドリ	1	長 380、径 150
13		K2-6	ドジョウモンドリ	1	長 390、径 135
14		K2-7	ドジョウモンドリ	1	長 387、径 155

15	K2-8	ドジョウモンドリ	1	長 380、径 133
16	K2-9	ビンモンドリ	1	長 275、径 117
17	K2-10	ビンモンドリ	1	長 275、径 118
18	K2-11	ユオケ	1	長径 790、短径 710、高 380
19	K2-12	ダマル	1	径 610、高 630
20	K2-13	ダマル	1	径 365、高 413
21	K2-14	口 (艀)	1	長 3400、幅 100
22	K2-15	口 (艀)	1	長 3110、幅 100
23	K2-16	タモアミ	1	長 3040、幅 290
24	K2-17	ジョレン	1	長 700、幅 335、高 430
25	K2-18	マエガキ	1	長 920、幅 410、高 400
26	K2-19	マエガキ	1	長 1204、幅 400、高 430
27	K2-20	ス (簀)	1	幅 3800、高 2245
28	K2-21	ス (簀)	1	幅 3700、高 2040
29	K2-22	ス (簀)	1	幅 1050、高 1610
30	K2-23	ダマル・インシュイカキ	一式	(ダマル) 径 610、高 248 (インシュイカキ) 径 435、 高 100
31	K2-24	インシュイカキ	1	径 420、高 200
32	K2-25	インシュイカキ	1	径 440、高 115
33	K2-26	インシュイカキ	1	径 430、高 100
34	K2-27	トアミ	1	網丈 3350
35	K2-29	アミ	1	網丈 800
36	K2-30	アミ	1	網丈 770
37	K2-31	アミ	1	網丈 740
38	K2-32	アミ	1	網丈 840
39	K2-33	アミ	1	網丈 700
40	K2-34	トアミ	1	網丈 2490 半製品
41	K2-35	アミ	1	網丈 700
42	K2-36	アミ	1	網丈 760

43		K2-37	アミ	1	網丈 660
44		K2-38	アミ	1	網丈 770
45		K2-39	シュロ縄	1	
46		K2-41	舟の舳先	1	長 810、幅 820、高 210
47		K2-42	モンドリのノド	1	長 208、径 85
48		K2-43	竹杭	一括	(1点)長 1210、幅 12
49		K2-44	イノコ	一括	(1点)長 83、径 20 葦簀編み用
50		K2-45	シズ	一括	(楕円球状・1点)長 22、径 7、 (球状・1点)径 10
51	100104	N3-1	ジャコイカキ	1	長径 1062、短径 327、高 210 復元資料
52		N3-2	マエガキ	1	長 1980、幅 660、高 428 復元資料
53		N3-3	ウグイ	1	下径 480、高 700 復元資料
54		N3-4-1	モンドリ	1	長 640、径 170 復元資料
55		N3-4-2	モンドリ	1	長 525、径 130 復元資料
56		N3-5-1	ウナギモンドリ	1	長 795、径 135 復元資料
57		N3-5-2	ウナギモンドリ	1	長 780、径 135 復元資料
58		N3-5-3	ウナギモンドリ	1	長 810、径 118 復元資料
59		N3-6	アンコ	1	長 890、径 400 復元資料
60		N3-7	ダラ	1	網丈 670 復元資料
61		N3-8	サデアミ	1	長 1060、幅 540

62	100258	53-1	トアミ	1	網丈 2320 修復用具付き
63		53-2	トアミ	1	網丈 1490 修復用具付き、半製品
64	100298	1	モンドリ	1	長 485、径 155
65		2	モンドリ	1	長 485、径 155
66		3	モンドリ	1	長 485、径 157
67		4	モンドリ	1	長 485、径 160
68	100329		マエガキ	1	長 3760、幅 440、高 330 復元資料
69	101561	1	鵜飼見物船イカリ	1	両幅 627、高 1195 宇治川改修で掘り出されたもの
70		2	鵜飼見物船イカリ	1	両幅 950、高 600
71		3	トアミ	1	網丈 2460 販売用に製作
72		4	釣り道具箱	一式	縦 216、横 151、高 155 鮎釣針・投網重石など
73		8	船模型	1	長 820、幅 220、高 280
74	102006	1	トアミ	1	網丈 1770
75		2	アユアミ	1	網丈 1590
76		3	ウナギアミ	1	網丈 4270
77		5	アミのオモリ鑄造道具	一式	シズなど
78	102585		ビンモンドリ	2	(1点)長 265、径 118 2つのビンモンドリが藁で括られている
79	102608	8	ビンモンドリ	1	長 265、径 110 田原川(宇治田原町)で使用
80	102627		タモ	1	長 3215、幅 590
81	102628		マエガキ	1	長 3530、幅 490、高 360
82	102653		トアミ	1	網丈2500
83	102654		トアミ	1	網丈3600

■漁労用具の写真と解説

資料の解説については、資料受け入れの際の記述及び、巨椋池で使われた東一口の資料については福田栄治氏の「旧巨椋池漁村の生活習俗 久世郡久御山町東一口の場合」(『資料館紀要 第10号』京都府立総合資料館 1981)や、『企画展資料 13 巨椋池の民俗』(京都府立山城郷土資料館 1991)を参考にした。



(左から) 100104 (N3-5-1、3)、100104 (N3-4-1)、100298 (1、3、2)

モンドリ (100104 は復元資料)

池はもちろん、川を上る魚が通りそうなところや用排水路などに仕掛ける竹製の漁労用具。一度中に入ると後戻りできないノドまたはカエシという細工が施されている。ドジョウモンドリ・ウナギモンドリなどその種類は豊富である。



100104 (N3-6)

アンコ（復元資料）

モンドリ的一种で、網状のもの。網状のモンドリには古くから使われていたアンモンドリと呼ばれるもの、そして大正 7、8 年頃から使い始められた改良型のアンコがあった。魚の通りそうなところ、川や水路では口を下流に向けて、両側の竹串を池の底に固定する。



(左から) 100102 (K2-9、10)



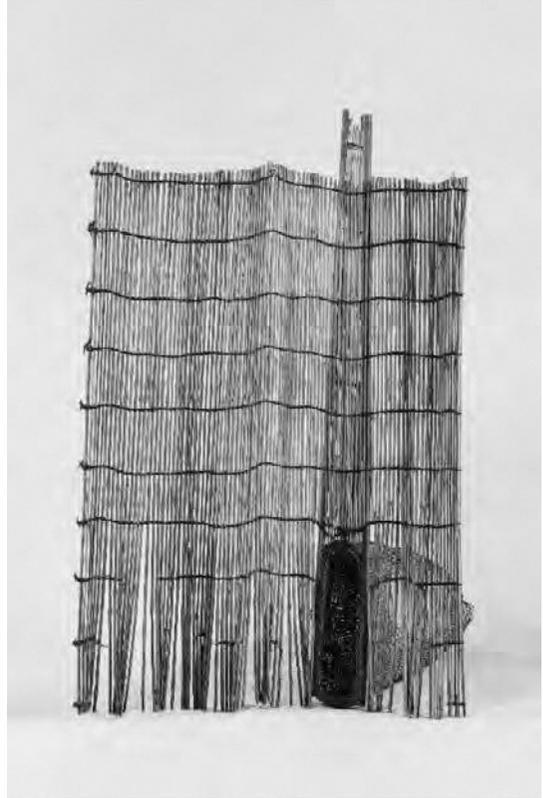
102585

ビンモンドリ

ガラスでできたモンドリ。使い方などは竹製のものと同じである。久御山町東一口からご寄贈いただいたもの。下の写真は購入されてそのまま保管されていたもので、購入の際2つ一緒に藁で包まれていた状態であった。その他、収蔵資料には、田原川（宇治田原町）や他の川で使用されていたものがある。子どもでも簡単に仕掛けられ、戦後も使われていた。



100102 (K2-1)

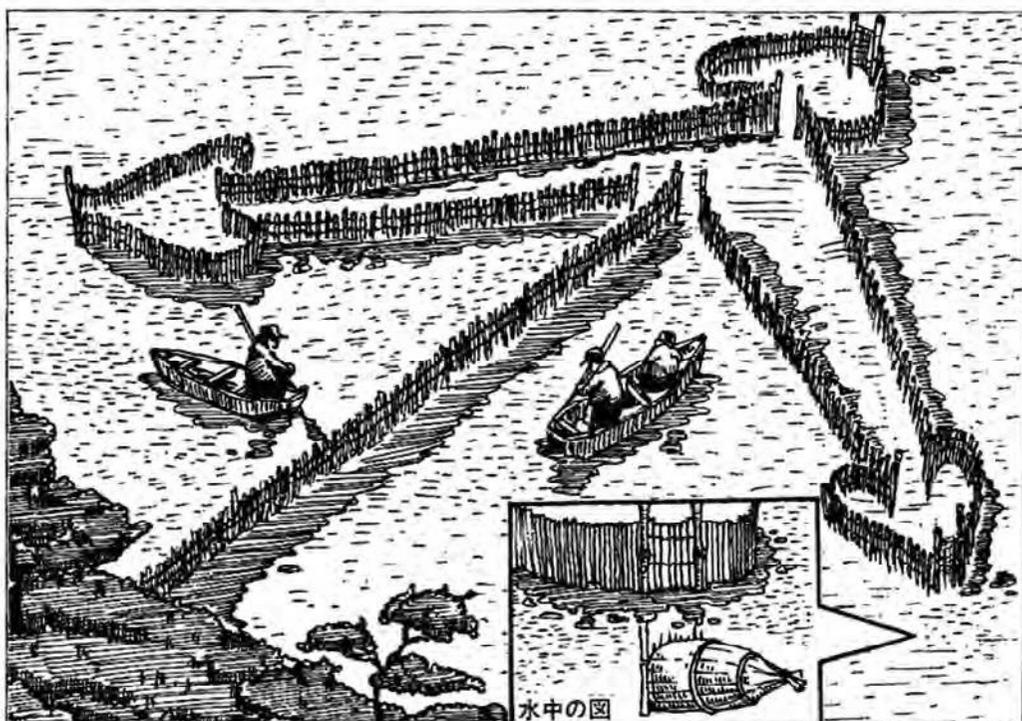


100102 (K2-1、22)

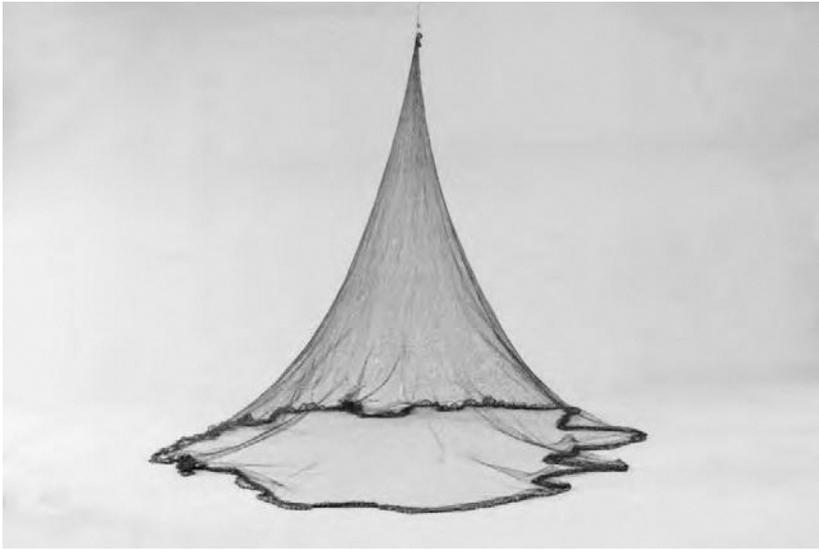
ジョウダテモンドリ・ス (簀)

モンドリの中でも、ジョウダテモンドリはダマやカラカサと呼ばれた魷漁で用いられたもの。スに接続するために口の両端に親竹がついている。

次ページの図のようにスを立て、魚が向かう先にオリと呼ばれた囲いを作り、その先にジョウダテモンドリを仕掛ける。魚を獲るときにはまずタモでオリの中をすくい、その後、ジョウダテモンドリを引きあげて、中に入っている魚を獲る。



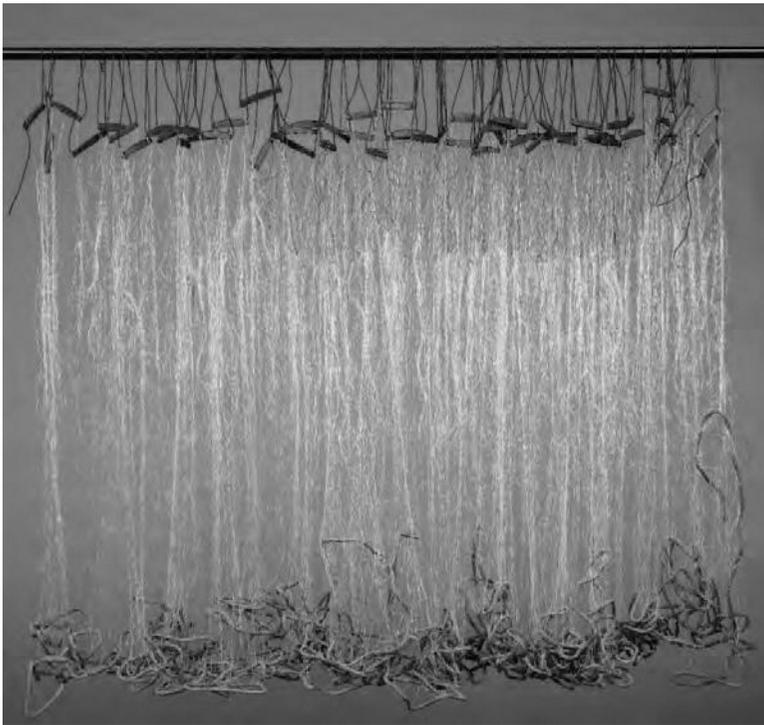
カラカサの図（京都府立山城郷土資料館提供）
京都府立山城郷土資料館 『企画展資料 13 巨椋池の民俗』（1991）から転載



100102 (K2-27)

トアミ (投網)

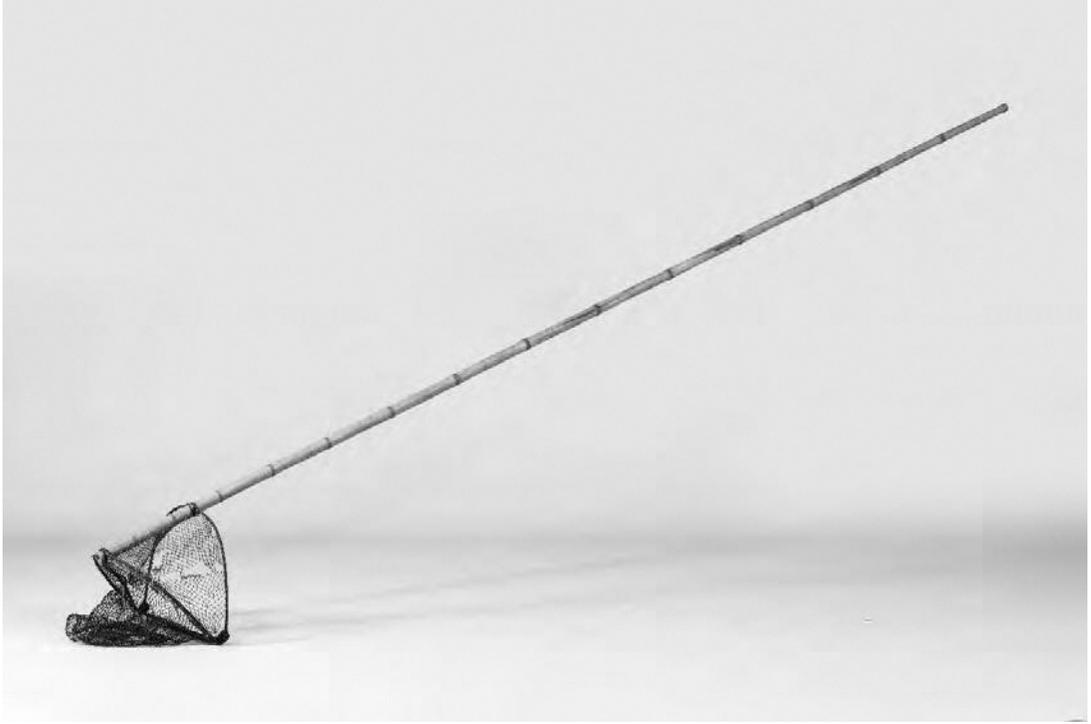
トアミは広げると円錐形をしており、上の部分をスエといい、下の広がった部分をスソという。スエからヒモがついており、リズと呼ばれる。リズを右手首に巻き、左手でスソを持って腰の辺りから半円を描くようにして投げる。



サシアミ (刺網)

サシアミはコアミと呼ばれた。魚の種類によって様々な刺網があり、魚の大きさで、網目が異なる。

100102 (K2-33)



マエガキ

船の上あるいは岸辺などから泥や藻とともに掻きあげて魚貝類を獲るもの。竹製のものや一部分を金属で強化するなど材質や形状も様々である。

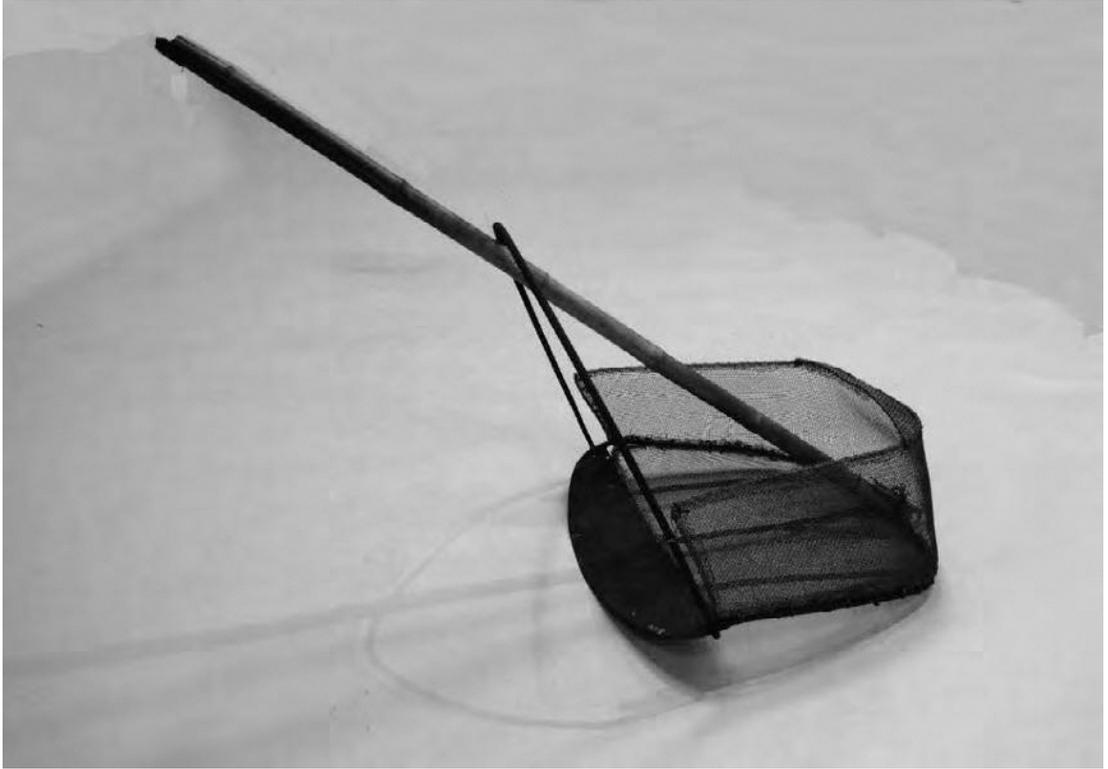
明治時代の改修工事により、独立湖となった巨椋池は、池の状態が大きく変わった。それ以降使われ出した漁労用具で、大正 5、6 年頃のことだという。

102628



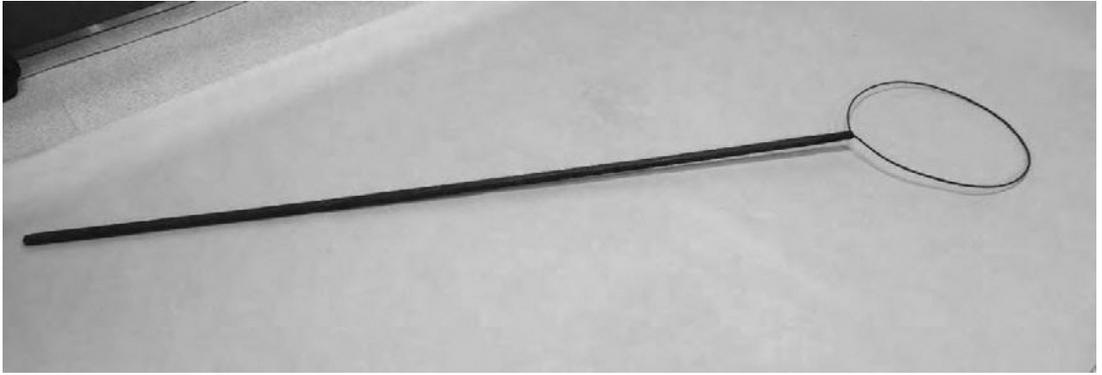
100329

マエガキ (復元資料)



100102 (K2-18)

マエガキ



102627

タモ

柄が長いことから、船や岸から魚をすくうためのものと考えられる。



サデアミ

船を棹であやつりながら静かに岸边に近づき、水草やマコモの根元に潜む魚を誘い出して、この網ですくい上げる。

100104 (N3-8)



100102 (K2-11、16)



100102 (K2-11)

タモアミとユオケ

タモアミは、浸木漁や魷漁等で魚をすくうために使用した。

ユオケは、魚桶（うおおけ）の読みかたが変化したもので、イケオともいう。鮮度が第一の淡水魚は生かしたまままで浜まで持ちかえるため、生簀としても使用した。



(左から) 100059 (U2)、100102 (K2-12)

ダマル

捕獲した魚を入れておくビクで、胴丸（どうまる）の音がなまったものといわれている。漁師が手作りしたものが多い。



ズギリダマル

巨椋池でズギリダマルを使い始めたのは、ダマルに比べて新しいことだった。『企画展資料 13 巨椋池の民俗』（京都府立山城郷土資料館 1991）によると、当時の聞き取り調査で、滋賀県の堅田で購入したものだ、と言われていたという。

100063 (23-40)



(左から) 100102 (K2-25、24、26)

インシュイカキ

遠江国（現・静岡県西半部）から運ばれるウナギの稚魚などをいれるイカキ（ザル）。遠州（えんしゅう）のイカキがなまってこのように呼ばれた。中内池ではさかんにウナギの養殖が行われた。



ジャコイカキ
(復元資料)

水草の繁った水際の小魚や貝、エビなどをすくい取るための道具。

100104
(N3-1)



ウグイ（復元資料）

船の近くを泳ぐ魚に狙いを定め、
上からかぶせて魚を獲る道具。

100104 (N3-3)



(左から) 100102 (K2-14、15)

口（櫓）

舟を漕ぐためのもの。当館では2丁收藏している。



101561 (3、4、8)、102006

オモリの鑄造道具一式と網類等

宇治川で観光船業を営んだ家から寄贈された道具類。網は自分たちで手作りし、スズに付けたおもりも鑄造した。

■ 3 資料目録 館蔵巨椋池関係資料

■館蔵の巨椋池関係資料について

開館以来約 40 年、多種多様の資料が当館に収蔵されてきた。現在、館蔵資料点数は約 2,600 件を超え、その中には巨椋池関係資料も含まれる。巨椋池関係資料の多くは干拓事業に関わる行政資料である。それ以外にも、江戸時代に描かれた古絵図や地誌類、大正～昭和初期に発行された各鉄道会社の沿線案内などがある。

□凡例

- 1) この目録は、収蔵資料のうち巨椋池に関する資料をまとめたものである。
- 2) 目録は、通番、収蔵番号、資料名、点数、年代の順に記した。
- 3) 収蔵番号はかならずしも連続しない。同一の収蔵番号に含まれる巨椋池以外の資料について、今回は対象としなかったためである。

通番	収蔵番号	資料名	点数	年代
1	100006	宇治郷周辺絵図	1	
2	100008	広野村・伊勢田村境界争論絵図	1	
3	100009	伊勢田村・林村争論絵図	1	
4	100039	富田溪仙版画『巨椋池』	1	
5	100090	大池漁業記念碑拓本	1	
6	100113	横大路村地図	1	
7	100114	京城勝覧	1	
8	100115	菟道川両岸一覧 乾	1	
9	100116	宇治川両岸一覧	2	
10	100117	淀川両岸一覧	4	文久元年
11	100119	都名所図会(拾遺含む)	11	
12	100127	京都めぐり(京城勝覧)	2	
13	100135	豊公伏水小幡御在城之図	1	
14	100138	山城国絵図(正保)	1	
15	100165	山城国絵図	1	安永 7 年
16	100171-11	奈良電気沿線名所図絵	1	
17	100171-12	洛東洛西洛南洛北 京名所交通図絵	1	昭和 3 年
18	100171-15	巨椋池開墾並沿岸耕地改良事業計画図	1	
19	100179	山州名跡志	20	

20	100191	淀川改修増補工事概要(写真帳とも)	2	
21	100230	山城南勝志	21	正徳元年刊
22	100231	都名所図会	6	天明6年刊
23	100235	宇治郡名勝誌	1	明治31年刊
24	100251	加茂川筋之図	1	
25	100261	宇治名所十景	1	
26	100265	宇治川風景図 (『宇治行図』卷子、木箱入)	1	明治36年
27	100266	宇治橋断碑拓本	1	
28	100267	宇治橋断碑追刻銘拓本	1	
29	100273	宇治名勝案内記	1	明治32年11月2日
30	100274	昭和28年水害写真	1	
31	100300-2	巨椋池干拓完成之図	1	
32	100317	蛭子嶋神社姫大神由来書	1	
33	100320	昭和28年水害写真 2枚	2	
34	100324	巨椋池観蓮図絵はがき	1	
35	100351	巨椋池干拓地工区図	1	
36	100416	宇治名勝案内記	1	明治32年12月15日
37	100419	宇治名勝図絵	1	大正8~12年
38	100425	伊勢田・新田・安田村絵図	1	明和8年
39	100454	近畿景観	1	昭和4年12月5日
40	100458	台風13号-旧小倉村-	1	
41	100459	台風13号-宇治市-	1	
42	100460	奈良電車沿線名所案内	1	昭和3年11月1日
43	100520	巨椋池古写真(蓮見・えり)	1	
44	100549	生塩魚行商人鑑札	1	明治42年4月2日
45	100564	宇治之真景	1	
46	100565	宇治名勝図絵	1	大正8~12年
47	100569	京都府写真帖	1	明治41年11月15日
48	100570	巨椋池土地改良区 旧事務所庁舎図面	15	
49	100595	京阪電車パンフレット	1	昭和12年9月
50	100595	京阪電車パンフレット	1	昭和前期
51	100622	宇治電沿線魚釣り案内	1	昭和前期
52	100645	近畿地方パノラマ地図	1	大正13年再版
53	100661	宇治名勝案内記	1	明治39年12月1日
54	100837	奈良電車沿線御案内	1	昭和戦前期

55	100860	奈良電車沿線御案内	1	昭和前期
56	100862	宇治川兩岸一覽 上・下	2	文久元年
57	100887	宇治川風景(絵はがき)	1	
58	100898	巨椋池関係パンフレット	6	
59	100904	巨椋池開墾国営工事事務所 作業日誌	4	昭和8~11年
60	100905	国営総合農地防災事業巨椋池地区完工式事業報告ならびに配布物2冊	3	平成19年2月
61	100910	巨椋池まるごとミュージアム関係資料	1	
62	100911	巨椋池関係旧行政資料	1	
63	100912	巨椋池歴史絵巻 原画	6	
64	100931	琵琶湖漁具図説	1	明治43年7月25日
65	100975	巨椋池関係パンフレット	5	
66	100984	巨椋池開墾国営工事要覧	1	昭和8年6月
67	101174	巨椋池干拓要覧	1	昭和34年11月
68	101194	巨椋池土地改良区資料	7	
69	101194	巨椋池 改良区報第1号	1	昭和29年1月15日
70	101194	巨椋池 改良区報第2号	1	昭和29年10月1日
71	101194	巨椋池干拓要覧 昭和44年追録版	1	昭和44年11月30日
72	101194	巨椋池の沿革と現況(コピー)	1	昭和50年代
73	101194	巨椋池庁舎史料室陳列予定表(コピー)	1	昭和50年代
74	101194	巨椋池干拓竣工40周年(祝賀式次第)	1	昭和56年11月15日
75	101194	巨椋池だより 改良区報第25号	1	昭和60年6月1日
76	101238	都名所図会	6	安永9年
77	101252	巨椋池の変遷 干拓竣工三十周年記念(写真帳)	1	
78	101239	拾遺都名所図会	5	天明7年
79	101295	京都府久世郡写真帖	1	大正4年
80	101343	巨椋池排水機計画概要	1	
81	101427	巨椋池関係資料(総会収集通知書・巨椋池耕地整理組合に就て・巨椋池耕地整理組合規約・巨椋池干拓並用排水改良事業計画概要)	4	昭和7年
82	101436	宇治川兩岸一覽 上	1	
83	101447	安田村耕地絵図	1	
84	101562	小倉村宇治郷入組絵図	1	明治

85	101611	山城州大絵図	1	安永 7 年正月
86	101729	宇治川筋拡張工事設計ノ概要	1	大正 11 年 4 月
87	102014	京都の山水	1	明治 36 年
88	102035	京都府写真帖	1	明治 36 年
89	102036	京都府写真帖	1	明治 41 年11月
90	102430	宇治川絵図	1	明治 41 年11月
91	102431	安田村池辺絵図	1	
92	102433	淀河筋図	1	
93	102483	都林泉名勝図会	5	寛政 11 年夏
94	102484	都名所図会	6	安永 9 年中秋 新板/天明 6 年 初春再板
95	102631-1	京都府久世郡写真帖	1	大正 4 年
96	102639	巨椋池開墾干拓計画略図	1	昭和 16 年頃

■館蔵の巨椋池風景写真

館蔵の明治後期～大正期に作成された「写真帖」に掲載された巨椋池の風景写真である。

101295・102631-1

「巨椋池第九十七」
『京都府久世郡写真帖』



102014

「巨椋池」
『京都の山水』



100569・102035・102036

「201 巨椋池」
『京都府写真帖』





100006

宇治郷周辺絵図



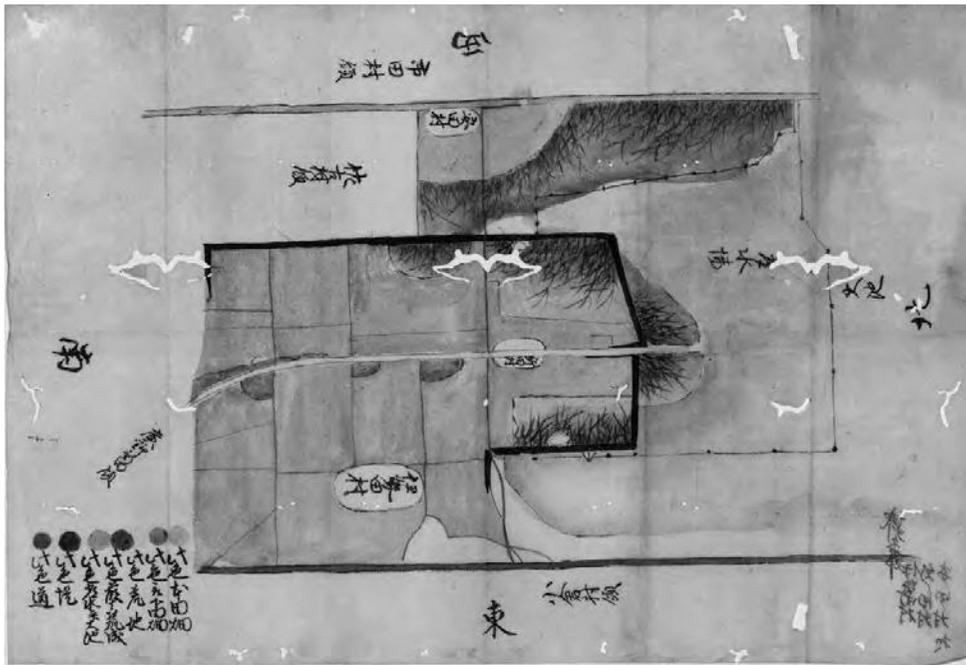
100135

豊公伏水小幡御在城之図



100009

伊勢田村・林村争論絵図

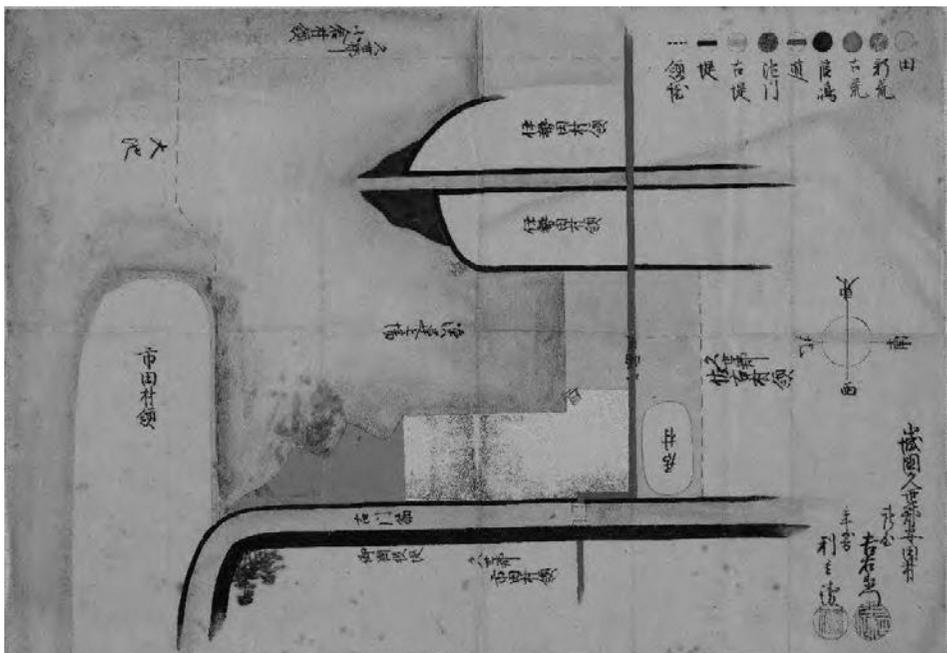
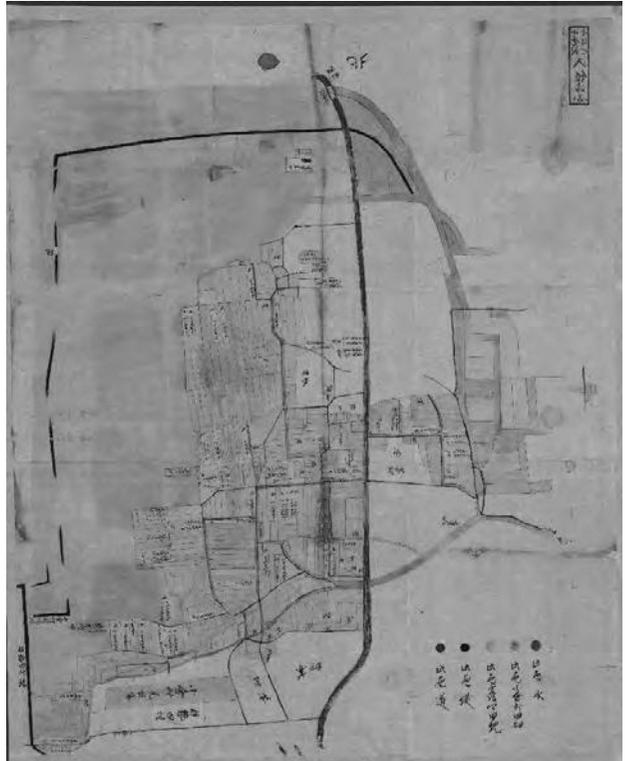


100425

伊勢田・新田・安田村絵図

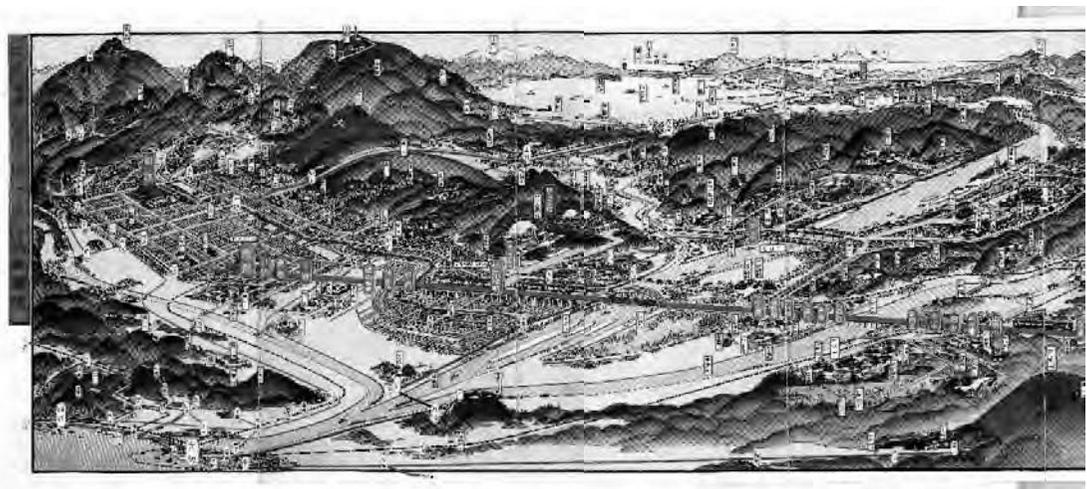
101562

小倉村宇治郷入組絵図



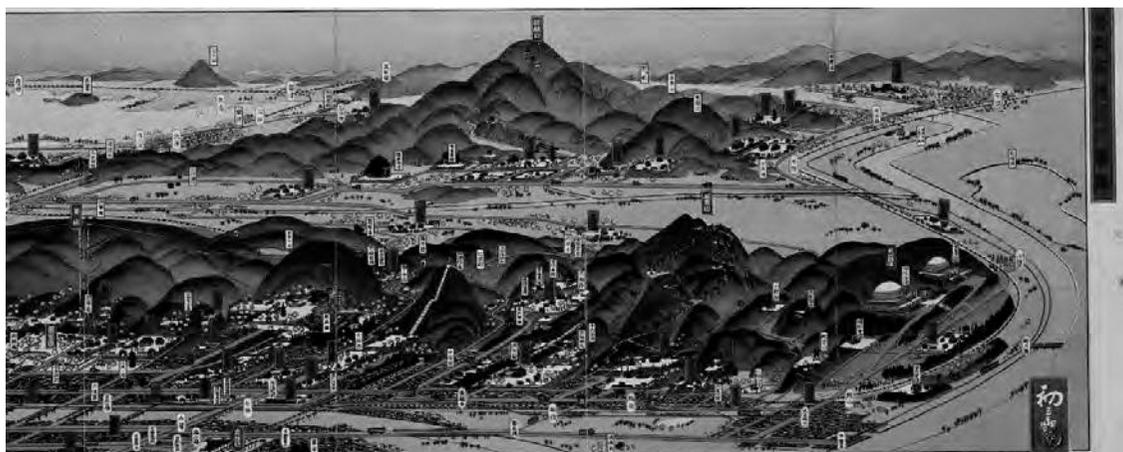
102431

安田村池辺絵図



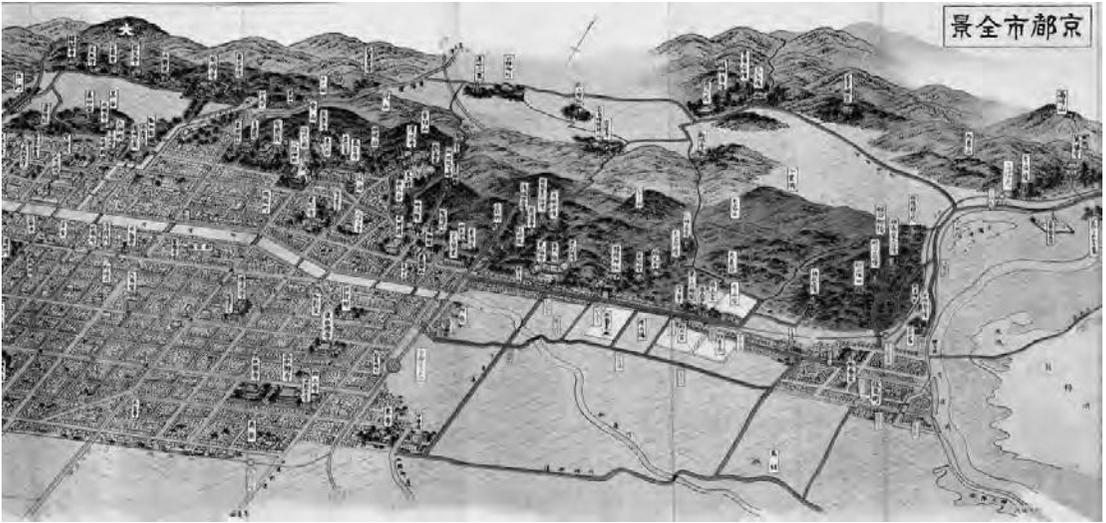
100171-11

奈良電気沿線名所図絵(部分)



100171-12

洛東洛西洛南洛北 京名所交通図絵(部分)



100645

近畿地方パノラマ地図



100300-2

巨椋池干拓完成之図 吉田初三郎画

■ 4（報告）小倉町・巨椋神社の秋祭り

小倉町は、かつてあった巨椋池の東畔の集落で、弾正町(京都市)、東一口(久御山町)とともに巨椋池の漁業権を持った地域であった。巨椋神社はその小倉町の産土神として大和街道に面した場所に鎮座する。ご祭神は武甕槌神・経津主神・天兒屋根神・比咩神の四神を祀り、境内には、子どもの守護神として信仰される子守神社がある。

秋祭りには、巨椋神社で古くから行われる祭りと、小倉町の新興住宅の地域でそれぞれに行っている祭りとがある。新興の地域では巨椋神社で御幣を受け、それを神輿に乗せ、地域を回るなどしている。

ここでは、前者の大和街道沿いの集落の氏子を中心とした秋祭りを紹介する。



巨椋神社

●秋祭りの日にちと次第

巨椋神社の秋祭りの期間は、祭神が本社から神輿に移る 10 月 1 日から、以前は体育の日の 10 日までであり、本祭は 10 日に行われていた。しかし、祝日の移動に伴って現在はスポーツの日（10 月第 2 月曜日）の本祭までとなっている。

現在、10 日までの直近の土曜日にお鏡を作り、しめ縄を緋い、翌日の日曜日にご祭神に神饌を供える御膳祭が行われる。そしてスポーツの日が秋祭りの本祭で、子ども達も集まり、神輿の渡御が行われる。令和 5 年（2023）は 10 月 7 日（土）、8 日（日）、9 日（スポーツの日）と一連であった。令和 6 年は 5 日（土）にお鏡作り、6 日（日）に御膳祭を行ったが、第 1 週目であったため、秋祭りの神事や神輿渡御は翌週（14 日（スポーツの日））になった。御膳祭と秋祭りの神事が 1 週ずれることになったが、御膳祭は本来の祭日の 10 日より早い日に行わなければならないという取り決めがあったため、この日取りになった。

また、大正 12 年（1923）に発行された『京都府久世郡小倉村要覧』には、秋祭りは 10 月 9 日が本祭であったと記述がある。それが昭和 41 年（1966）に 10 月 10 日が体育の日と決まって以降、多くの人が休みになる日に移っている。さかのぼって『京都府久世郡村誌』（明治 14 年（1881））には、祭日は 9 月 11 日とある。これは旧暦での祭日であり、新暦になって 10 月に移行したと思われる。

祭りを巡る日にちの変更は、その時代背景に合わせて行われ、その時々祭りの何を

大切にしているかがみえる。10月9日から10日に変更となったのは、祝日に行うことで多くの人に参加できるようにとのこと。そして体育の日(スポーツの日)が第2月曜に移動になり、それにもなって本祭は移動になった。その中で、御膳祭は本祭とずれることになって、10日より前に行わないといけないという取り決めがあり、現在も10日までに行われている。このことは祭りを考える上で大変興味深い。

●「御膳」の奉納

この秋祭りの特徴として挙げられるものに、本祭の前に行われる「御膳祭」がある。神輿に移られたご祭神へ「御膳」と呼ばれる神饌を奉納する神事で、令和6年は1週ずれたが、本来は本祭の前日に行われる。

まず、御膳のお鏡の餅つきが総代の家で行われる。その日の午後に御膳用のしめ縄を綯う。しめ縄はロンジと呼ばれる御膳をいれる木箱に締めるものと、御膳のおこわの桶に締めるものの2種類作られる。餅米の藁で、なおかつ餅米が成熟するまでの藁が青いうちに刈り取りをし、乾かしておいたものである。令和6年は総代が用意し、いつもはうるち米のみを作る田んぼで、畳一畳分だけ区分けして餅米を作ったという。

そして次の日に御膳を作る。御膳は神社の総代の家で、巨椋神社の宮司が主導して作



ロンジとおこわの桶に張られたしめ縄



(左) お鏡
(右) 御膳の鮎を焼く



(左) ロンジに入った御膳
(右) 御膳祭 (総代の家)

り、12個のロンジに入れる。御膳の中身は、お神酒、お鏡、おこわ、鯛、カマス、スルメ、鯉、鮎である。巨椋神社は四神を祀るため、いずれも4つずつ用意する。お鏡は餅を4枚重ね、その上からサツマイモの輪切り2枚と里芋を竹串で刺したもの、おこわは桶に入る。鯉は洗いにしたものの、鮎は焼いたものである。鯉や鮎を供えるのは、この地域に巨椋池で漁業を営む家が多かったことに由来する。

出来上がると総代の家で、献饌（神饌を奉納すること）までの神事が行われ、神社に向けて出発する。御膳は神社の当番である宮係によって、神社の神輿の前まで運ばれる。この時、宮司を先頭に総代3人、鯉・鮎を奉納する人1人、宮係13人の順番に列を組む。現在は神社への道中は軽トラックに御膳をのせて運ぶ場合もあるが、神社近くでおろして行列を組み直し、鳥居をくぐる。総代はモーニング姿、宮係は黒の礼装で参加し、運ぶ際には右肩の上に持ち、列をなしてゆく。先掲の『京都府久世郡小倉村要覧』には、

「往時ハ新婦各一膳ヲ頭上ニ戴キ十数人正装行列ヲナシ以テ社頭ニ練リ込ミタリシナリ」とあり、現在のように宮係ではなく、小倉に新しく嫁いだ女性がこの役目を担ったという。新婚の女性が頭上に神饌を乗せ、奉納するという事例は他所でも見られる。

総代のあとに「鯉・鮎を奉納する人」が行列すると先述したが、御膳祭には鯉・鮎を奉納する人が総代とともにモーニング姿で



御膳を持った宮係の行列

参列をする。この人は祭りの当日には参加せず、御膳祭のみの参列になる。小倉の中で最後まで漁業に従事し、現在も鯉や鮒を扱う仕事をしている人で、代々この御膳祭に鯉と鮒を奉納しているという。『宇治市史6』には「十月九日は、この神社の祭礼の日であったが、その前日には漁師を生業とする人たちや、その他の氏子たちが相寄って、神酒・強飯・鏡餅、それに巨椋池で獲れた魚・鳥などを調理し、十三の膳に盛り上げる。(中略)漁師たちは鮒の焼物や鯉の刺身などを四組づつ作り、四柱の祭神への供物としたのであった。」とあり、神饌に関しては、秋祭りを取り仕切る総代ではなく、地元の漁師などが率先して奉納していたことがわかる。それが現在みられるような、鯉・鮒奉納者の参列につながるのではないかと考えられる。



御膳を神輿前に奉納する

●神輿の渡御

本祭の日には、宮司による神輿前での安全祈願の神事後、子ども達が神輿を引いて集落をまわる。そして、神輿が神社に帰ると、子ども達は解散となり、今度は大人が同じ神輿を担いで集落をまわる。この2回の神輿渡御は、道中にいくつかの休憩所が設けられ、休憩を取りながら行われる。

現在、巨椋神社には大きい神輿と小さい神輿の2基がある。

大きい方の神輿は拝殿に据えられており、現在動かすことはない。もともとはこの神輿を大人が担いで



子ども達が神輿を引いて集落をまわる

で集落をまわったが、昭和10年代を最後に担がれなくなった。担ぐことはなくなったが、現在も変わらず、10月1日の神幸祭には神輿に神霊を移し、本祭が終わって本殿に還るまで神さまが乗る。そして、秋祭りの期間は本殿ではなく、この神輿の前で御膳が並べられ神事が行われる。一方、小さい方の子ども神輿は昭和12年に寄進されている。大人神輿が担がれなくなり、子ども神輿が寄進され、代わって集落をまわることになっ

たという。

このように子ども神輿のみの渡御が続いたが、30年ほど前（令和6年調査）、子ども神輿を大人も担いで、祭りを盛り上げようということになり、「巨椋みこし会」が発足した。大人の神輿の担ぎ手は、主に昭和20年代生まれの小倉出身の人々で結成されるグループ「蓮の実会」と、地区の消防団の人々である。もともとは「蓮の実会」だけで行ったが、年齢が上がったこともあって小倉の消防団に依頼する形となった。



大人が神輿を担いで集落をまわる

宇治市内に限らず、以前は大きい神輿を担いだが、修理の必要があることと、現代人には体力的にも人員的にも難しいことから、神輿渡御をやめている神社も多い。そして、大きい神輿に替わって子ども神輿がまわっている。小倉では、その神輿を再び大人が担ぎ始め、祭りを盛り上げようとしている。祭りの変更は、その時々には神社の宮司や氏子で考えられ、状況は様々に変わっていくが、祭りを盛り上げたい、存続させていきたいという人の思いからなのである。巨椋神社の神輿渡御はその一例である。



御膳（奉納する神饌）のお鏡を作る
御膳は総代の家で準備する。



お鏡をうちわであおぐ
表面にしわがよるのを防止し、つやを出すため。



おこわを桶に入れる
しめ縄を張った桶におこわを入れる。



御膳をロンジ（御膳の木箱）に入れる
それぞれの御膳をロンジに入れていく。



お鏡の形を整える
御膳のお神酒、お鏡、おこわ、鯛などは
巨椋神社の宮司が調整する。



ロンジ・桶に張るしめ縄を織う
総代が準備した餅米の藁を左縄に織い、
おこわの桶用とロンジ用の2種類を作る。



御膳祭

総代の家で御膳祭を行う。御膳祭の献饌(神饌を供える儀式)の段で巨椋神社へと向かう。



御膳を奉納する

宮司、総代、鯉・鮒の奉納者、宮係が行列を組んで神社へ向い、御膳を奉納する。



御膳を奉納する

行列が鳥居をくぐって巨椋神社に入る。



御膳を奉納する

御膳を宮司が受け取り、神輿前に供える。



神輿前に並んだ御膳

拝殿の神輿の前に御膳を並べる。



御膳祭

神輿前に御膳が整うと御膳祭が行われる。



本祭の日に獅子が氏子の家をまわる
2つの獅子舞が大和街道の東西に分かれて
氏子の家をまわる。



神輿の準備
神輿を蔵から出し「蓮の実会」のメンバー
などが子ども神輿の準備を行う。



子ども御輿の安全祈願の神事
子ども神輿の渡御の前に宮司による
神事が行われる。



大人が子ども神輿を担いで集落をまわる
子ども神輿が神社に帰ると「蓮の実会」、
小倉の消防団の人々によって同じ神輿で
集落をまわる。



地域を練り歩く
渡御の間、地域の人々による酒などの
振る舞いに応じて、神輿を上下に揺さぶる。



拝殿の御百燈を灯す
10月1日の神幸祭から本祭の10日（以前の
本祭日）まで、朝と夜に御百燈をあげる。

むすびにかえて ー漁を見ていた人々の聞き取りからー

かつて、宇治市・京都市・久御山町にまたがる大きな池「巨椋池」があった。しかし、池は昭和 8 年(1933)に始まった干拓工事によって、昭和 16 年には広大な耕作地として生まれ変わった。池がなくなってすでに 90 余年が経つ。それまでも、巨椋池では漁が万全にできる状態ではなかった。また 90 年前に漁に携わった人々となるとゆうに 100 歳を超えるため、当時の様子を聞き取り調査によって知ることはできない。しかし、巨椋池の漁業に対しては外部からの注目もあり、京都府立総合資料館(現京都府立京都学・歴史館)などによって、昭和 50 年代頃に実施された聞き取り調査をまとめた資料が残されている。季節によって獲れる魚、鳥、貝のことや漁労用具の名称、その使い方、また巨椋池の漁業権についてなど、久御山町東一口を中心に多角的な聞き取りが行われた。こうした調査によって、当時の状況を詳しく知ることができる。

では現在、巨椋池の漁業について、誰かに聞くことはできないのであろうか。宇治市域で巨椋池の漁業権を持っていた小倉では、漁のこと、漁労用具のことについて聞ける人は、すでにいないと思われる。しかし、同じく巨椋池の漁業権を持った久御山町東一口では、漁が行われていたのを見て、という人々がおられることがわかった。

この人々は昭和 20 年代前半に生まれ、中学生に入る頃まで漁を見ていたという。この話はもちろん巨椋池ではなく、集落の南を流れる古川や宇治川における漁である。この人々によれば昭和 30 年頃までは、かつて巨椋池で行われていた漁のほとんどが、古川や宇治川でも行われていたといい、実際に漁に携わられたわけではないが、その状況を覚えておられた。以下に、聞き取りの内容を本報告書のむすびとしたい。

古川には、「ワンド」と呼ばれる、池のように川幅が広がった場所があった。川幅は 30m ほどあり、ここで浸木漁も行っていたという。浸木漁は、柴や柳の木などを水中に密集させて沈め、魚を寄りつかせる。そこにあらかじめ船を近づけておき、船を入れたまま周囲を囲う。そして沈めた柴などを抜いて、投網を打って魚を獲り、最



現在の東一口を流れる古川

後はタモなどですくうといった漁法である。

浸木漁は約 10m 四方であったが、こうした大きさの漁が古川のワンドでもできていた。また、丈が 5m ほどある投網漁があった。魚を驚かせて獲るデンチ漁もあった。アンコ漁、延縄漁やウナギ漁（延縄漁やウナギ漁は主に宇治川でみられた）もやっていたのを覚えているという。

この人々の中には、当時、漁を行っていた老人から話を聞いておられた方もいた。それによると、この頃はその季節にいる魚を、それぞれが様々な漁法を用いて獲っていたという。つまり、すでに当時は専門の漁師がいるわけでもなく、かつ漁師によって一定の漁法が定まっていたわけでもなかった。かつての巨椋池では、漁法や漁労用具の使用数などを明記した鑑札が漁師に発行されて、漁業が行われていた。ちなみに現在でも滋賀県の琵琶湖の漁師は、その漁法を専門に行うことが多く、例えばこの時期にはエビタツベを使ってエビを獲る漁師、というようになっている。

一方、漁以外では、漁に使う簀を冬場に作ったという。竹を割ってから、編んでいく作業は、女性や子どもたちが多く携わったといい、実際に子どもの頃に編んでいたという人もおられた。漁に携わる老人たちが、投網などのシズ（オモリ）を、鉛をとかして作っていた様子や、投網を編んでいる光景も覚えているという。また、古川では、水位が低いと「どぶ貝」をよく獲った。川に入り、足で探って感触があったら潜ってどぶ貝を獲った。タニシやハスの実も取って食べていた。ハスの実は、殻を割ってそのまま食べたという。

昭和 30 年代の古川では、5 艘程の船があった。これらの船は、巨椋池でも使われていたヒラブネであった。船には竿 2 本、艀 1 本がのせてあった。竿は竹で、まっすぐ伸びたものを用い、縁をとっておいた。この竿は、どんなに負荷をかけても折れなかったという。艀は漕ぐのに技術がいる。今回お話しを伺った人は、子どもの頃から船に乗っていたので今でも船を漕ぐことができるという。

その後、古川での漁は水質の悪化等により行われなくなり、川幅も現在のように狭くなっていった。

昭和 20 年代前半に生まれた人々から話を伺うと、その人々の父親は漁業に携わっておらず、漁業は祖父の代までであったという。祖父たちは、巨椋池で本格的に漁を行っていた世代であり、その世代の人々が巨椋池なき後も古川で漁を行う人々であった。祖父たちの船に乗せてもらい、古川から宇治川まで出て行った記憶があるという。一方、父親の世代は、漁業から一変して広大な耕作地を悪戦苦闘しながら耕してこられた。そして、話を伺った人々は、勤めに出る方も多いが、父の跡を継ぎ、米作りのほか、淀大根や九条ネギなどの商品作物の生産にも取り組んでおられる。

このように、巨椋池の干拓事業を契機として、世代によって語られる話は、漁業の話から農業の話へと変わっていくのであった。今後も干拓後の人々の暮らしを調査し、より深く巨椋池、その周辺の地域の歴史的変遷に追っていきたい。

巨椋池関連書籍

- 『宇治市史一 古代の歴史と景観』 宇治市 昭和 48 年(1973)
『宇治市史二 中世の歴史と景観』 宇治市 昭和 49 年(1974)
『宇治市史三 近世の歴史と景観』 宇治市 昭和 51 年(1976)
『宇治市史四 近代の歴史と景観』 宇治市 昭和 53 年(1978)
『宇治市史六 西部の生活と環境』 宇治市 昭和 56 年(1981)
『巨椋池』 (宇治文庫三) 宇治市教育委員会 平成 3 年(1991)
『収蔵文書調査報告書 5 巨椋池漁師仲間文書』 宇治市歴史資料館
平成 14 年(2002)
『久御山町の今昔』 久御山町郷土史会 昭和 56 年(1981)
『久御山町史 第一巻』 久御山町 昭和 61 年(1986)
『久御山町史 第二巻』 久御山町 平成元年(1989)
『久御山町史 史料編』 久御山町 平成 4 年(1992)
『巨椋池干拓誌』 巨椋池土地改良区 昭和 37 年(1962)
『巨椋池干拓誌』 (追補再版) 巨椋池土地改良区 昭和 56 年(1981)
『巨椋池干拓六十年史』 巨椋池土地改良区 平成 13 年(2001)
『巨椋池干拓の変遷』 巨椋池土地改良区 昭和 46 年(1971)
『巨椋池干拓要覧』 巨椋池土地改良区 昭和 34 年(1959)
『巨椋池の民俗』 京都府立山城郷土資料館 平成 2 年(1990)
『史友会三十年誌』 伊勢勢田史友会 平成 12 年(2000)
『巨椋池ものがたり』 巨椋池ものがたり編纂委員会 平成 15 年(2003)

謝辞

本書の執筆にあたり、京都府立山城郷土資料館、巨椋神社、小倉町の皆様、鶉ノ口彦晴氏にご協力をいただきました。記して謝意を表します。

本書は、「1 巨椋池漁労用具資料収集の経緯」「3 資料目録 館蔵巨椋池関係資料」を大塚朋世、「2 資料目録 巨椋池等の漁労用具」「4 (報告) 小倉町・巨椋神社の秋祭り」「むすびにかえて一漁を見ていた人々の聞き取りから一」を奥村晃代が担当し、「1 巨椋池漁労用具資料収集の経緯」の一部を鎌田智子が補佐した。

収蔵資料調査報告書

収蔵文書調査報告書 1	「白川金色院」と恵心院	1998年(平成10)
収蔵文書調査報告書 2	笠取地域の古文書	1999年(平成11)
収蔵文書調査報告書 3	上林三入家文書	2000年(平成12)
収蔵文書調査報告書 4	宇治上神社文書	2001年(平成13)
収蔵文書調査報告書 5	巨椋池漁師仲間文書	2002年(平成14)
収蔵文書調査報告書 6	上林春松家文書	2004年(平成16)
収蔵文書調査報告書 7	白川・藤川家文書	2005年(平成17)
収蔵資料調査報告書 8	戦争関係資料	2006年(平成18)
収蔵資料調査報告書 9	上林春松家文書 2	2007年(平成19)
収蔵資料調査報告書10	幕末の銅版画	2008年(平成20)
収蔵資料調査報告書11	宇治市の写真資料 1	2009年(平成21)
収蔵資料調査報告書12	宇治市の写真資料 2	2010年(平成22)
収蔵資料調査報告書13	宇治市の写真資料 3	2011年(平成23)
収蔵資料調査報告書14	絵ハガキ 1	2012年(平成24)
収蔵資料調査報告書15	片岡道二家文書	2013年(平成25)
収蔵資料調査報告書16	宇治市の写真資料 4	2014年(平成26)
収蔵資料調査報告書17	京都社寺境内図	2015年(平成27)
収蔵資料調査報告書18	戦争関係資料 2	2016年(平成28)
収蔵資料調査報告書19	宇治茶の民具	2017年(平成29)
収蔵資料調査報告書20	宇治郷の古文書	2018年(平成30)
収蔵資料調査報告書21	上林味ト家文書	2019年(平成31)
収蔵資料調査報告書22	宇治茶の引札	2020年(令和2)
収蔵資料調査報告書23	尾崎坊家文書	2021年(令和3)
収蔵資料調査報告書24	吉田初三郎関係資料上	2022年(令和4)
収蔵資料調査報告書25	吉田初三郎関係資料下	2023年(令和5)
収蔵資料調査報告書26	戦争関係資料 3	2024年(令和6)

※7までは、『収蔵文書調査報告書』として刊行した。

収蔵資料調査報告書27 巨椋池等の漁労用具・関係資料

2025年(令和7)3月30日

編集・発行 宇治市歴史資料館

〒611-0023

宇治市折居台1-1

TEL (0774) 39-9260

FAX (0774) 39-9261

E-mail : shiryoukan@city.uji.kyoto.jp

